



いつものやつ

1月15日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月15日のおはなし「いつものやつ」

いつものやつを、と客が言う。

たったいま、店を出て行く客と入れ替わりに入ってきたばかりの客だ。
私はかしこまりましたと言って、客に背を向け奥の棚を物色する。
物色するふりをする。

本当は物色なんてしていない。なぜなら、いつものやつが何なのか思い出せないからだ。それどころか客が誰かも私にはわからない。もっと正直に言うと、なぜ自分がカウンターの中にいるのか、それもわからない。記憶喪失ではない。私は自分が誰かよくわかっているし、ここがどこかもよくわかっている。ただ、なぜ自分が、客としてここに来たはずの自分が、カウンターの中で接客をしているのかがわからない。

そういう意味では記憶喪失と言ってもいいのかもしれない。ごくごく短時間の記憶喪失。何らかの事情で、バーテンダーの服を身に着け、このカウンターの中に立たされる羽目になった事情だけが欠落した記憶喪失。そうだ。肝心のその部分を覚えていない。覚えていないぞ。落ち着け落ち着くんだ。こういう時は焦らずにゆっくりやるんだ。まず、思い出そう。どこまでなら覚えて.....

どうした、と客が言う。ないのか、いつものやつ。

客に声をかけられた。私は考え事に夢中になるあまり動きを止めてその場に立ち尽くしまい、客がそれに気づいてしまったのだ。私は振り返る。

はい、もうしわけございません。考えるより先に言葉が口をついて出る。その代わりにとびっきりの一品がございます。

とびっきりの一品だって？ うさんくさそうに客が眉根にしわを寄せる。確かにうさんくさい。自分で言っておきながら、いかにもうさんくさい響きだ。待てよ。うさんくさいなあと思った記憶が自分にもある。なんだっけ。わりと最近のことなんだが。

じゃあいいよ、それで。客が言う。まずかったら承知しないぜ。

古い翻訳調のミステリーか日活アクションみたいな喋り方をする人だな、とぼんやり考えながら、てきぱきとカクテルを作り始める。後ろの棚から2本、足元から1本ボトルを取り出すと、ミキシンググラスに氷を入れ、その上から3種類の酒を手早く注いで行く。その流れるような動きを客が驚いたような目で見ている。本当を言うと、私自身も驚いた目で見ている。自分にそんな芸当ができるなんて知らなかった。

あれは使わないのか？ と客が尋ねる。あの、ほら、量をはかるやつ。

メジャーカップですね、作業の手を止めず、サイダーを注ぎステアしながら、すらすらと私の口が答える。もう手で覚えていきますので。

そういうものなのか？ やや不審そうに客は口をとがらす。でもはかった方が正確だろう。なんならお客さん、賭けをしてみます？ わたしは一瞬手を止め、にっこり微笑んで客を見る。わたしが正確に15ml注げなかったら、一杯奢りますよ。

え？ いいよ。何故かあわてた口調で客が言う。別に疑っているわけじゃないんだ。泡立つ柔らかいオレンジ色のカクテルをグラスに注ぎ、布巾でグラスの足元を軽く拭く。

お待たせしました、できあがったカクテルを差し出ししながら、わたしは微笑む。新作ですよ。名前は？

そう、〈いつものやつ〉にしようかと思っています。

へえ、と客が笑ってカクテルに口を付けた瞬間、わたしはいつも通りカウンターの外側のスツールに腰掛けている。カウンターの中にはたったいまカクテルに口を付けた客が、客だった男がバーテンダーの身なりになって立っている。ぼんやり立っている男を見ながら、わたしはそっと席を立つ。店を出て行こうとすると入れ替わりに客が入ってくる。その男が言うのが聞こえる。

いつものやつを。

(「いつものやつ」 ordered by 又一--san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

いつものやつ

<http://p.booklog.jp/book/42275>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42275>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42275>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.